

巻頭言

初冬の語らい



基 訪 談

本会学会誌担当理事 電子技術総合研究所

初冬のある日、淡い日だまりで、数人の学会仲間が集まって語らっていた。

「“情報処理学会”丸という船は、MS 風や TI 風という強い向かい風に悩まされながら、IN 海や MM 海を苦勞しながら進もうともがいているようではないか。運悪く前夜の突風による大波で羅針盤の調子が狂ってしまい進むべき方向が定かではなくなっている上に、たとえがむしゃらといわれてようとも、とりあえず前に進むにもエンジンを全開にするだけの十分な燃料がない状況でもあるようだ。」

「MS と TI はマイクロソフトとテキサスインスツルメントのことね。産業界はそうかもしれないけれど、学会として MS や TI とあまり関わりがないのじゃないかな。インターネット (IN) やマルチメディア (MM) といってもアカデミアとしての研究課題はもっと深いところにあるのだし。」

「“情報処理学会”を“日本の情報処理産業”と置き換えてもよさそうな描写だね。」

「学会と産業界とが同じ状況にあるという認識はどこかおかしいんじゃないですか？」

「産、学、官はそれぞれ立場が異なるのだから、目的も違えば価値観も違うはず、という論法ね。そもそも情報技術は技術シーズの創造と応用システムの実現とで時間順序が一樣でないところに特徴があるわけだから、やれ“学”だのやれ“産”だのと区別しているとアメリカにますます差をつけられてしまうのではないの。その昔 ARPA ネットを仕掛けたのが“官”だとするとアメリカの官もすごいしね。」

「そうかもしれない。情報処理学会の場合、そのことを十分に意識する必要がありそうね。」

「そうなんだよ。こないだ村上陽一郎著の『科学者とはなにか』(新潮選書)という本を読んでいたら学会って何かを歴史的に解説してあって興味深かった。情報処理技術の学会って、あの伝統的な学会の行動様式をまねていたんではだめね。」

「それってどういうこと？」

「つまり、学会とは、もともと科学者が自分達の地位を守るための職能組織で、学会員が共有する知識体と比較した上で二番煎じでないサムシング・ニューがあるかどうかを評価基準とし論文をレビューして業績として評価する仕組みがその特徴だと分析している。19 世紀半ば以来からの歴史があるそうだ。」

「アカデミアの会員はだいたいそれが学会のメインの役割だと認識しているみたいだけど。ところが、学会員が共有する知識体が、ほかの学問分野よりもスピード、ダイナミックレンジとも、比べ物にならないほど大きく変化するのが特徴でしょう、情報処理の世界は。そもそも業績の形態は論文だけでないし。」

「そのとおり。自分達で新しい価値観と基準を創り出す努力を学会がしなければ、職能組織としての役割を会員に対して果たせなくなるのではないかな。開発したソフトウェアを会員の業績として評価する仕組みなど欲しいのだけど。今の情報処理学会は我々の業績が正当に評価されるためにあまり助けになっていないよね。」

「あとの問題は燃料か。十分な燃料がないというのは、お金と人材が不足しているということ？」

「よい人材を育てなければ、ということがさっきいった時の心だけど、情報処理学会に限っていえば、会員数も増やしたいということ。」

「その意味からいえば、学会誌の役割は大きいよね。みんなが読んでくれているはずだし。もっと面白くならないかな。ほかの学会もいろいろ知恵を出しているしね。競争だ。」

「その点の改善作業はもう始まっていて、来年の 4 月号からは石田晴久編集長の采配で、新機軸が出てくるそうだ。」

「楽しみにしていよう。」

この冬を越せばまた梅の香が薫る春がやってくる。

(平成 9 年 10 月 30 日)